

学級編制か学級編成か

“organizing a class” or “a class made up”

花 井 信

Makoto HANAI

（平成13年10月9日受理）

1

教育史研究者は、なぜ、科学的、学問的手続きによる、議論の組み立てをしないのだろう。『日本教育史研究』（第20号、2001年）を拾い読みして、腹ふくる思いになった。

同誌のなかで、柏木敦が戸崎敬子の『新特別学級史研究』の書評を書いている。両者のやりとりに、学級「編成」か、学級「編制」かという議論が出ている。

戸崎は、史料引用を除き、「編成」を使うと言う。理由は、「編制」は制度的・法令的見地の用語だからだと。この言い分は、「編成」論者に共通する言い訳のパターンである。そして「編成」は教育的見地にたつ用語だと、戸崎は続ける。ここに、疑問を抱く。法令用語として定着しているものを、なぜ使わないのかの説明がない。戸崎の論理を使用すれば、教育法とか教育制度とかは、二律背反で使えない。教育的でない教育法解釈もあろう。教育的でない教育制度も存在しえよう。しかし、教育的教育法解釈が進められてきたのではないか。教育的教育制度のありようが追求されてきたのではないか。安易に「教育的」などというあいまいな基準を設定しないでほしい。積極的に、「編成」という用語を使う根拠を、「編成」論者はすべきである。

また、戸崎は、「編制」ということばには、形式的な枠にはめられた組織という意味が強く「感じられる」と、言う。逆に「編成」には、いろいろな諸要素を考慮しながら、組織化していくというダイナミックな意味合いが含まれるように「感じられる」と、言う。学問的用語を、「感じ」で使われてはたまらない。小説の表現であるならば、イメージや風情を言葉に自由に託して結構だけれども、学問を「感じ」で論じられては困るのである。厳密な意味を含ませて使うのが学術用語だろう。

対して柏木は、書き手がコンテキストのなかで統一していれば、どちらでもよい、と突き放したもののいいをしている。問題はそのコンテキストに道理があるかどうかである。学術用語について、一定のニュアンスを含むことを前提とすれば、どちらを使ってもいいのであろうか。書評という短文のなかで、求めるのは酷だとしても、学問的詰をしううえでの、当面の結論か。そうでなければ、わざわざ二つの用語について、問題にする必要はない。

つまり、ふたりとも、学問的根拠なしに、どちらを使用すべきかの議論をしている。嘆かわしい。

だから、文面上、花井がすでに提起したことを、無視している。先人の発言を検討していない議論の組み立ては、科学的、学問的ではない。

2

花井の問題提起は、ふたりとも承知のはずである。なぜなら、柏木が高橋智の書評に言及しているからである。高橋は、花井の発言を受けて、「編成」・「編制」どちらがいい？ と問題を投げかけた。

花井は、『教育史学会40周年記念誌』のなかで、こう書いた。

語義的に「編成」は小さい単位を集めて大きな集合体にする場合に用い、「編制」は大きい単位を小さな部分に分割する場合に使う。したがって「十両編成」とか「学級編制」が正しい表記である。

花井は語義的解釈をしたうえで、つまり、学問的手続きをしたうえで、どちらをどういうときに使用するのか、書いたのである。この記述をふたりはすっぱり落としたまま、「感じ」でぼかし、「どちらでもよい」と逃げている。花井説の当否の検討をしないまま、勝手な自説を学問的手続きなしに、語っている。

そこで、学問的手続きに即して、再論しよう。

3

ひとつの手法は、国語辞典の語義的解釈の検討である。多くの国語辞典は、両者の区別をあいまいなまま説明している。なかには、正反対な解釈をしているのがある、というのが国語辞典の現段階である。推測すれば、柏木は、こういう状況だから、どちらでもいい、としたのだろう。しかし、言葉の用例・用法に詳しい辞典もある。花井が依拠したのは、『現代国語例解辞典』（第二版、小学館、1997年）である。そこには、こう説明されている。

〈編制と編成〉は混同されやすいが、「編成」は「個々を組み合わせで大きな単位にする」ことに、「編制」は「全体を分けて単位を作る」ことに重点が置かれる。

これほど明快な説明をした国語辞典は、ほかに例がない。そして、「編成」の用例として、「六両編成の電車」というのが挙げられ、「編制」の例として、「学級を編制する」が示されている。

筆者がその後に見出したのは、『岩波国語辞典』（第六版、2000年）である。そこでは、両者がこう説明される。

【編成】個個（ばらばら）のものを、まとまりのある全体に組織化すること。「番組の——」「10両——の電車」。〈中略〉

【編制】団体の任務達成に適する組織を定めること。「5人ずつで班を——する」。〈中略〉
〈両者——引用者〉はしばしば混同して使われる。

このように、編制と編成を区別して解釈しようとする国語辞典によれば、前者が全体から個別へ、後者は個別から全体へという志向をもった語句であることが分かる。

学級は、たとえば、入学した大勢の子どもをいくつかの単位に区分することであるから、編制が正しい用法と言えるのである。

この点、同じ岩波の『広辞苑』にある「編制」の説明は、内部に矛盾を含んでおり、採ることはで

きない。

ただし、ほとんどの辞典に共通するのは、編制は軍隊に密接にかかわる用語である（軍隊では、編制と編成は厳密に区分されて使用されるが、本稿の立ち入る問題ではない）、ということである。そこに、学級編制なるものの、いかがわしさが窺えるのではあるが。

現段階での、編制と編成の用法・用例、語義を区別して解釈しようという意図が明確な辞典によれば、以上のとおりである。

であれば、時間割はどうなるか。これは、各々の教科の内容を、一日あるいは一週間単位に組み立てるものであるから、「編成する」になる。

4

第二の手法は、ほかの言語ではどう表現しているかの検討である。日本語のあいまいさを、他言語で明確に捉えることが可能だからである。とりあえず英語に、それをみてみよう。

『チャレンジ英和・和英辞典』（第三版、ベネッセ、1996年）によれば、「へんせい 編成」という項目を引くと、

Our class consists of forty-five students.

わたしたちのクラスは45人編制です。

a train made up of ten cars

10両編成の列車

という例文が出てくる。

それで、consistとmake upを『カレッジライトハウス英和辞典』（初版、研究社、1996年）で調べると、consistには、

Congress consists of two Houses.

議会は二院より成る。

と、

Water consists of hydrogen and oxygen.

水は水素と酸素から成る。

という例文が出ている。

make upを調べると、

Eleven players make up one football team.

11人の選手で一つのフットボールチームができる。

という用法が出ている。

この用例から言えることは、consistの場合は、CongressとかWaterがまずあって、その構成要素

がなにか、という意味付けである。他方make upの方は、playerがまずいて、かれらが集って一つのフットボールチームができる、という意味である。

そう考えれば、『チャレンジ英和・和英辞典』の用例の意味も分かり、学級編制は、まず学級というものがあり、それは、45人で構成されている、という意味になる。他方電車は、1車両が10台連結して、一本の電車編成になる、ということである。

先に挙げた国語辞典と、意味合いは同じである。

ほかの和英辞典で確かめよう。『ワードパル和英辞典』（初版、小学館、2001年）で、「へんせい編成」を引くと、

This train is composed (made up) of six cars.

この列車は6両編成です。

Thirty people form a class.

30人で1クラスを編成している。

Our class consists of 30 people.

私たちのクラスは30人からなる。

と、出ている。

学級編制の場合、やはりconsistを用いている。ただし、people=pupilが主体となると、formを使うらしい。

また、別の和英を調べると、次のような表現に出合う。

We organized the new pupils into six classes of fifty each.

新入生を50人ずつ6クラスに編成した。

『プログレッシブ和英中辞典』（第2版第14刷、小学館、2000年）の用例である。学校が主体となった場合の表現である。

いずれにせよ、電車の編成と学級編制は、英語でも別表現を取ると、言えそうである。

5

第三の手法は、国語学者と同じように、古い文献の、用例にあたっていく方法である。

まず、手許にある明治後半期の学校管理書をひもとくと、例外なく「学級編制」である。一々書名を挙げるまでもない。

それでは次に、教育経営・制度ではなく、教育理論の書として、沢柳政太郎が1909年に刊行した『実際的教育学』を検討の対象としよう（以下『澤柳政太郎全集』第1巻、国土社、1975年からの引用ページ数を引用文言の後に付す）。第五章「教育の制限」の第九節は、「学級の編制から生ずる制限」と題されている。冒頭、

適当なる員数を以て一学級を編制したる場合に於ける教育と、その程度を越えて非常に多人数なる生徒を以て編制したる場合とは自然にその効果に違ひのあることは疑ないことであらう（88）

と述べて、文中には「編制」が頻出している。

そして第七章は「学級論」である。ここでは、一例を除いて、「編制」という用例で溢れる。例外というのは、第二節の末尾で、

中学校高等女学校等に於ては学級と云へば必ず単式の編成であるが (108)

と述べているくだりである。思うに、誤植である。

沢柳は、制度論として、学級編制を論じてはいない。「教授上の便宜」(106)とか「訓育上の目的」(106-107)という見地から立論している。であれば、

学級の組織を教育学上より研究すれば、近頃に至り初めて気が付いて議論せらるゝ所の特別学級、補助学級の編制の如きは (107)

と、しるすのである。

「個性」を考慮すれば、一学級は25人ないし35人が適当という提案 (110) は、今に生きる原則である。

教育的に考えて、学級編制のありようを論じている。

そこでさらに、より「教育的」であろうところの教育方法の文献をみてみよう。1912年に刊行された及川平治の『分団式動的教育法』(以下「世界教育学選集」明治図書、1972年のページを引用文言の後に付す) について、みてみよう。

最初に目次を一瞥すると、「第二 本論」の「第二編 能力不同という事実的見地」の第三章第一節は、「学級編制に関する方案」という節題になっている。及川の基本的用語法は、ここに示されている。本文を細かくみていくと、いくつか逸脱がみられるとしても、基本はここにある。

「第一 序論」の第一章第二節には、混用がみられる。たとえば、

心身の能力を顧慮せずして年齢別に学級を編制し、同一課程の履修を強要し、一斉教育をもって学級教育の本体と思うはそもそも大なる謬見である。(23)

と言うかと思えば、

世には、能力別に学級を編成して英才教育、低能児教育を施そうとするものがある。(23)

〈中略〉

学級編成に関する諸方案 (24)

といった、使用もある。

これは、制度的な年齢による学級を「編制」とし、彼の主張する能力別学級は「編成」であるかの、錯覚を引き出す。しかし、「第二 本論」の「第二編 能力不同という事実的見地」の第二章の書き出しに続く文では、こう書いている。

たとい、年齢別に学級を編成しても、能力別に学級を編制しても、性別に学級を編制しても、

一斉教授によって、各児の必要を満足せしむることはできない。(191)

前引とは、逆の使用法である。

そして同じく第三章の第一節は、既述したとおりの節題である。第四章の「本体たる学級教育」の第一節「活動単位としての学級」では、

学級組織の中核は学級の編制であります。(228)

と、書く。以下、第六章でも、

(一)……ゆえに、たとい能力別に学級を編制して、……(236)

(中略)

(六)……(1) 児童の能力によって学級を編制するの可否いかん。(237)

とあり、第十一章でも、

甲 能力別に学級を編制したる場合。(257)

と一貫させている。及川は教育方法の見地から、学級は「編制」という用法を採っている。

それに対して、木下竹次の場合はどうであろう。1923年に刊行された『学習原論』をみてみよう(以下「世界教育学選集」明治図書、1972年のページを引用文言の後に付す)。その目次を見ると、「第十章 学級の編成」とある。しかし、その本文を読めば、「編制」で統一されていることが分かる。第二節のなかで、

等級編制による単式学級の教授(262)

とか、

混合編制の複式学級にては(262)

と、書いている。そして、第三節の「学級組織に対する要求」でも、

思うに個性を発揮し個人の能力を増進し、それによって社会の進歩をはからんとする学級編制は必ず融通性を帯びたものでなくてはならぬ。(265)

としたり、

懈怠な教師・進歩しない教師などはかくのごとき学級編制に反対するけれども(266)

としている。

つまり、「児童・生徒の個人的存在を認める」(263) 立場の教授法を主張する木下も、学級組織の仕方は「編制」として表現されているのである。

「編成」論者が、教育的といくら強弁しても、教育史を一瞥すれば、「編制」が正統な使用法であることに、疑義を挟む余地はない。

ただし、編制から自由になった例も見落とせまい。野村芳兵衛の1926年に刊行された『新教育における学級経営』(以下『野村芳兵衛著作集』2、黎明書房、1973年から引用)である。そこでは、一貫させて学級編成を使っている。第二章「生活の場所としての学級経営」の八は、「学級編成」と題されている。冒頭、

学級編成は、学校を生活の場所と見るか文化伝達の場所と見るかによって、その方針が明瞭に二つに分れる。(91)

と提起し、学校を生活の場所とみることが大事だと判断する。「家庭的」な学級編成にしたいと野村は願う。しかし、編成とし、編制ではない理由を野村は述べていない。

6

以上、学問的議論の組み立て方の一例を示した。このぐらい予備的考察をして、編制か編成かの判断をしてもらいたい。

たまたま手許にある『日本教育新聞』2001年9月7日号を見ると、埼玉県志木市が2002年度から、小学校1、2年生の学級を25人規模にすると、報じている。その記事は解説欄も含め、「小人数学級編制」とか、「二十五人程度の学級を編制する方針」と表現している。ジャーナリストが正統な使い方をして、教育史研究者がそうでないのは、恥かしい。

思うに、編成論者は、もともと学級編制という言葉を知らず、常識的に〈へんせい〉は〈編成〉と思い込んでいるのだろう。指摘されて、法令用語だと言いつくろうにすぎないのではないか。学級編成とする積極的な根拠を、学問的に提示してほしいものである。

研究の世界から足を洗おうと考えている筆者としては、学問的な議論の作法を踏むことの重要性を、書き遺しておきたい。

<付記>

アジア・太平洋戦争後の学級経営論を拾い読みすれば、宮坂哲文の「日本における学級経営の歴史」(著作集Ⅲ)は、二、三の例外を除いて、「編制」である。宮田丈夫の著作集Ⅱでは、「編成」で一貫されている。しかも、細谷俊夫の「学級論」を引き、細谷が「編制」としているところを、「編成」とわざわざ読み替えている。ただし、理由は示されていない。もともと宮田は道德教育の研究者である。教育方法史に通じていないせいだろうか。